

---

# 螺旋階段

七夜ソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

螺旋階段

### 【Zマーク】

N8281E

### 【作者名】

七夜ソラ

### 【あらすじ】

ソラが書いた詩集です。これを読んで、何か思ってくださったら嬉しいです。

## 諦め

目指したもの

望んだもの

手に出来ないと

すぐ諦めて

伸ばした手を

そつと握り締める

そこに見つけたのは

小さな、小さな、光

それでも太陽に負けないよう

大きな光を放つていて

それは私には眩しすぎて

見つめる事さえ叶わない

こんなちつぽけな光にさえも

私は勝てない

どうしてこんなに一生懸命になれる?

努力したって

大きな太陽に敵うはずなのに

意味ないのに

いつだつてそう

私の前にはいつも大きな敵が

勝てるわけない

初めからわかる

だから目指すのをやめたの

無意味な事をして何になる?

無駄なだけ

傷ついて

泣いて

落ち込んで

僻んで

ひとりで馬鹿みたい

でも、この光はそれをしている  
諦めずにずっと輝いている

昔の私はこの光みたいだったのだろうか  
この光を直視することができたの

過去を振り返ることはできても

戻れはしない

でも、未来は変える事が出来る

この光に見習つて

作つてみると

あまりにも簡単なことで

今までの自分が

馬鹿みたい

自由になつたら

大空を羽ばたいて

高い、高い、太陽も

目指せるほど高く

羽ばたけて

毎日新たな未来を築いてゆく

明日は太陽を手にできると

信じてる

いつか必ず

絶対に手にするときを

前だけ見ているから

諦めずに今日も

羽ばたいていける



## 時計

春の風に乗つて漂つ花びらが

田に田に多くなつていく

風が吹くと田の前に広がる桃色

春の臭いをかいで背伸びして

ぶかぶかの制服に身を包み

君の会うために駆け出す

氣づけば全速力

息があがつてゐるのさえ氣づかない

君の田の前まで駆けていく

肩で息をしながら

君の前で微笑む

満開の桜の下の満面の笑み

楽しかつた

君といれば辛いことも苦痛ではなかつた

なあ、君もそうだろ？

あつとこつ間に二度田の春

もつそろそろ別れの時

その別れが永遠なんて僕は知らなかつた

だから誓つた君と再び会つことを

外の光は日に日に強くなるばかりで

蝉が五月蠅く鳴いている

君はどこへ行つてしまつたの

ただ会いたい、それだけの小さな願いなのに

どうして？

山の色は一変して

赤や黄のコントラスト

そこに隠れた寂しさ

散り行くのはいつかと

冬はもう皿の前にあるから

ねえ、僕に気づいてよ

あの時の制服もこめやどーにあるのか

長い長いじかん

涙さえ枯れはてて

心に空いた穴

君がいたのは幻だったのだろうか？

そう想いつひとつになつてこる自分がいる

空を見上げては何かを思つて

なぜかそこには君がいるような気がした

気のせい?でも、

すこしへじ肩が軽くなつたような気がした

窓を開けて身を乗り出すと

温かい風が僕の頬をなでた

やせじへ、やつと

嗚呼、君はそこそこいるのかい？

答えてくれるものなんていないけど

確かに僕はそつかんじたんだ

待たせてごめん

もうすぐ僕もそっちに行くから

待つて

ほんの少しの間だけ

寂しくないよ

だつて今までやがただつただじょ？

兄弟（前書き）

私の大好きなあるアニメの詩です。

## 兄弟

僕の初めてできた

たつた一人の家族

僕を利用してたなんて嘘でしちゃう?

そんな嘘すぐに分かるよ

僕たち兄弟だからね

僕は兄さんの役に立つことができたかな?

大好きだよ、兄さん

兄さんにとつて、僕は偽者だけど

僕にとつて兄さんは

本当の兄さん以上の存在だつたんだ

たつた一人の家族

誕生日、プレゼント嬉しかった

初めて迎えた誕生日

僕の凍つた心が溶けていく

兄さんと過ごした想い出は忘れないよ

大事してくれてありがとう

もっと一緒にいたかった

本当の兄さんの弟として生まれたかった

でも、僕は今とても満足だよ

だって兄さんのために死ねるのだから・・・

大好きだよ、兄さん

何もかも失った

希望、未来

俺はなにをすればいい?

教えてくれるものさえいない

嗚呼、弟よ

俺はお前を憎んでいた

なのに、

この引き裂かれるような胸の痛みはなんだろ？

知らず知らずのうちに前を本当の兄弟と感じていたんだ

どうしてこんな奴のために命を捨てる？

死ねると思ったのに

死ぬのはいつも俺じゃなくて、俺の大切な人

失ったものを奪い返さなければ

無くしたものは俺が作る

ゼロからの創造

裏切り、憎しみ

孤独な感情は増すばかり

そう、自分のためだつた

上手く操って使ってきた

俺は王だ

コマはいらない

取り戻したいのは

家族、愛

だが、それは遠のいていくばかり

復讐は遂げた

だが、孤独感は増すばかり

でも、これでいい

自分だけを犠牲にしていればいい

大切な人、今度こそ、

会いに行くから

兄弟（後書き）

できが悪いので良く分からなかつたかもしませんが、弟から主人公（兄）の詩に替わつていく感じで書きました。

ひとり

憎悪

憎しみは強まり高まる

欲しいのは牙と爪

必要ない心

捨てて孤独に浸る

孤独

なれたはずなのに

1人で生きていくつて決めた

たつたひとり

周りは敵ばかり

信じられるのは自分だけ

自分を殺して

人格を作る

すべてをだます

自分さえも

つくりものの自分

消えた本当の自分

とうに忘れた

私は誰だ？

わからない

誰も教えてくれない

みんな死んでしまった

なんのために存在している？

この気持ちはなんだ？

自分さえも信じられない

孤独

押しつぶされそうになる

自分を抱きしめる腕に

温もりを感じる

確かに存在する自分

生きている

心が枯れ果てても

感じる鼓動

目に映る

流れる血に実感した

たつたひとり

恐れる事などない

失うものなんてもうないのだから

巨大な壁さえ自分の目には映らない

進み続ける

終着点など存在しない

運命からは逃れられない

そう決まつてたんだ

自分がここに生きている限り

空が蒼く澄み渡る

この世界

自分の存在する場所など存在しない

独自で生きる

そう決めた日から

自分は存在しない

誰の心からも忘れ去られた存在

必要としていないものだったのに

一番大切だった

そのことには創めから知っていたんだ

取り戻せない

取り戻さない

独自で生きると決めたその日から



皿に映るのは確か

果てしなく遠い空

白い雲

風を切り進む翼

そんなことやえ過去の記憶とじて消える

空を臨んだ

闇の空さえも

落ちたじゅくもとむじゆうやくじゅく

いじに笑き刺さる

いつになつたら消えてくれぬ。

孤独と不安

飛べない鳥

見ることさえできない翼

私は哀れな存在なのですか

## 世界観

他人とは異なる世界

目に映るは土色だけ

閉ざすことにした瞳

一度と開かない

見たくない

自分の真実を

奪われた自由

感情はどこへ

あの鳥のように

高く高く飛んで

空の果てへと消えてしまいたい

田に映ることのない

あの蒼い空の果て

抜かれた翼

戻ることは一度とない

たびたび振り返つてはあの時を思つ

哀れな鳥よ

飛ぶことさえ叶わぬ

生きる意味

価値など存在しない

私はただ

世界の果ての小ささよ

多くは望みはしない

ただ風になれるのなら

命などもつこらない

ただもう一度

あの空を

自由を手にしたいだけ

哀れみなどいらない

一人で生きる

生まれた時から

味方などいない

たつた一人の存在

消えさつてしまつても

誰も気づかない

小さな光

だれかに必要とされたなら

私にも何かを照らすことができたなら

世界に存在意味があつたなら

よかつたのに

暗い闇

私の光では打ち勝つことは出来ずには

飲み込まれていく

逃げられない

助けも届かない

底に落ちていく

深い闇へ

一人落ちたい

心中（前書き）

今回は短い詩が3つです。

## 心中

蒼空を仰いで

届きもしない光に

手を伸ばして

鳥が空を翔る

何を想う

夢にもならない

届かぬ光

握りしめてみても

刹那の間さえ

満たすことも出来ず

永久の感情

込み上げられ

溢れる痛み

胸を貫く

愛する気持ち

つかむのは遅すぎて

全て消えたあと

たつた独りきりで

天を仰いだ

頬に雨がつたう

残つたのは孤独

悲しみ、絶望

自分自身の翼を折る

心に突き刺さるは

記憶の破片

煌めく光を浴びて

さりげに輝く雨に

何を映し出す

戻らない

遠い心の形

{} {} {} {} {} {} {} {}

蒼空から降り注いだ  
灰色の雨

潰して取り戻す

奪われた世界

消えたこころ

灰色の水の中

映したものは何よりも  
わたしを知っているのだろう

何のため戦い続ける?  
あの日を取り戻すため

蒼空から降り注いだ  
灰色の粒

破壊して無くす

# 偽りの自分 壊れた世界

あの日はもう戻らない

## 消えない罪 消えない罪

守るものも失つた

深く染まるこころは  
独り灰色になつていく

「うから笑える田は  
一度と来ない

闇雲が晴れていく

自分に世界に終止符を  
与えるのさえ自分、一人

## 落ちる雨

もう一度あの日々を



空は晴れているのに

自分の上にはいつも雲一つ

雲が流れ落ちる

全てを包み込む

大空さえ

味方はしてくれない

太陽の光

私の上だけには

射し込まない

いつも灰色の中に

佇む

小さな陰

## 矛盾（前書き）

「メントくれた方ありがとうございます。」  
メチャクチャ嬉しいです！！  
励みになります

## 矛盾

耳に届く声

かすかな声

でも、

たしかに聞こえた

誰？

何をしてほしいの？

どうして？

無関係でしょう？

僕には関係ない

僕は独りだから

僕の存在が孤独

生まれたときから

死んでた

誰にも認められない存在

でも生きてる

だけど死んでる

矛盾

何がいけない

誰にでも存在する

人間なら

僕は人間？

何ものでもない

消えそうな存在

存在してるかさえわからない

無関心

傷つかなくてすむ

誰が？

わからない

解らないのに

その誰かのために

背負い続ける

誰？

言わないで

聞きたくない

知りたくない

答えなんて必要ない

存在しない

こころの底では解つてる

何を？

認めたくないんだ

存在しないのに？

独りにして

つながりを持ちたくないんだ

関わりを持つのが怖いんだ

僕のこの手は誰も救えない

傷つけるだけ

触れないで

近づかないで

言葉をかけないで

優しくしないでよ

憎んで

爪を立てて

僕を傷つけてよ

君のために血を流させてよ

生きてるって示してよ

一人にしてよ

独り闇に閉じ込めてよ

闇へ消えたい

消えさせて

消してほしい

僕の存在

最初からないけど

消してほしい

僕がいた世界

たしかに生きてきた道を

解放して

孤独

死

不安から

全てから

解放してよ

独りはやだよ

死にたくないよ

怖い

闇に取り込まれる

逃げたい

怖い

暗いよ

誰かそばに寄り添つてよ

## 矛盾（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました（ - v - ） m

## 欲望

振り返りたくない

前に進みたい

けつして止まりたくないんだ

後戻りは出来ない

僕と君

生きたい

僕は生きるんだ

君と出会ってそう思えた

はじめて自分で認められたんだ

やっとやう思えた

時間がない

はじめて時に迷らしたいと思つた

止めたいと思つた

今、確かに僕は生きてる

時間がほしい

もっと君と一緒にいたい

僕にとってのたつた一人の存在

大切なんだ

大好きなんだ

離れたくないんだ

ずっと一緒にいたいんだ

どうしてなの

待つてくれないの

もう少し

一分でもいい

一秒でもいい

もっと少なくともいい

一瞬でも君の手を握りたいよ

ずっと握りたいよ

死にたくないよ

消えたくないよ

君の側にいたいよ

離れたくないよ

怖いよ

おいでかないで

独りにしないで

どうして一緒にいられないの

どうして?

こんなにも願っているのに

こんなにも願っているのに

助けて

もう一度

わがままな僕を救つてよ

手を伸ばして

闇から引きずり出してよ

僕の名前を呼んで

触れて

掴んで

おいでかないで

分かつてる

逆らえない運命

そう

僕が望んでしまったから

もう戻れない

だけど

多くは望まない

少しだけだから

笑いたい

そうそれだけ

もう一度

君と

笑いたい

ありがとう

伝えたい

君は生きると言いたい

僕の分まで生きてほしい

闇に落ちていく

たつたひとり



## 星の数

隠れた光  
離れていく  
現れた雲  
近くに来て  
空を覆づ  
暗い空  
遠い切れ目  
後悔は雨の粒よりも多く  
心は雨雲より黒く  
望んだことは見えない太陽よりも解らない  
後悔はしたくない  
しないように生きなさい

誰かが言つたけど

そんなの無理でしょ、う?

そういう君は何を悔やんでいるの?

聞いてみても決して教えてくれない

口外できる後悔なんて本当の後悔じゃないと君は言つ

本当の後悔って何?

したことの大きさ?

苦しんだ時間?

基準は何?

あなたの後悔だけが基準?

他に苦しんでる人はいないと

そう思つてるの?

自分の傷をそれ以上自分で広げないで

雨が降る

さうして強く降る

遠くに見えてた

空の切れ目が見えなくなつた

もし後悔しないヒトがいたなら

それはヒトじゃなくて

機械でしょう

何事も指示された通りに動く

自由は与えられない

鉄のからだ

雲が割れた

その隙間から

見えた僅かな光

僅かだがとても明るい輝き

君だけじゃないんだ

今、抱えている思いは

もし今後悔してるのなら

あなたが生きてる証だから

一生懸命生きている

誰からの指図も受けない

天翔る鳥より自由な

青い空

僕だけじゃないんだ

錘を心にくくりつけているのは

雲が流れた

大きな太陽が

注いだ眩しい光が

僕らを照らし出す

## 悪魔

「」の感情をどの様に

綴ればいいのか

わからない

苦しい

やだよ

なんで

こんなにも

自分を殺して

笑ったのに

自分じゃない

自分を作つてまで

頑張つたのに

なんですよ

私だけ

救われないの

どうして

あなたと関われないの

嫌われたくないよ

好んでよ

こんなにも

頑張ってるのに

なんでだよ

なんで嫌うんだよ

何のための

自分なんだよ

本当の自分は戻つてこない

犠牲は大きすぎて

手にしたのは何一つない

知りたくもない

事実

なんで私に話す？

心に秘めとけばいいんじやないの

何故

私に関わる

嫌いならほつといでよ

私を笑つて何が楽しい？

それならば直接

私に刃を向けるよ

殺してしまえばいいじゃん？

存在意味なんてないんでしょ

私を好きなヒトなんていない

友達なんていない

私を知ってるヒトは誰もいない

消えても誰も気づかないんじやない

こんな思いなら死んだ方がましかもね

なんだよ

もういいよ

どうして

諦めたい

全てを放り出して

たつた一人で生きたい

私が人を欲すれば嫌われるから

こんな痛み抱えるくらいなら

もとから一人がいい

あなたに好かれようと

努力しても救われない

無駄だつて

消えられたらしいのにね

闇に一人落ちたい

心なんてない

必要ない

自分を捨てる

必要ないでしょ

私、

生きてないから

ヒトは誰かに頼つて生きてる

一人では生きていけない生き物

だから私はヒトじゃない

その前に生きてない

存在を消してほしい

私は人を愛しても

愛してもらえないから

あなただって

私は必要ないと

だから

私が誰かを

愛すことはもうない

一度とない

自分もない

取り戻したくても

取り戻せない

誰のせい？

わかつてるんだよ

あんたのせい

だが私はあんたに

何もしない

群れてしか生きれない

弱い奴を相手にするなんて

馬鹿らしいから

私はそこまで醜くない

神さま

祈りはしない

誰が祈る?

それは弱い奴がすることだから

悪魔が私の味方に付いてる

魂なんていらない

悪魔と手を結んだ時点で

私は醜いのだろう

じゃあ、ない心を

埋め尽くすよう

闇を飼おうではないか

心が少し残つてたから

感情があつたんだ

そつか

こんな楽な気持ちはない

さあ復讐を遂げよつか

許しをいつ

頭に刃を落とす

醜いでしよう

誰が？

そんなこともわからなくなつた

心がないから

悪魔に操られる

それでもいい

いないだらつ

この感情を理解できるものは

わかつてほしいとも思わない

世界が私だけなら

よかつたのに

さあ私を闇へ

連れていけ

私の愛す

孤独の闇へと

落とせ

私はそこで孤独を

一生、愛す

## アリス（前書き）

アリスってキャラクターだけで話はあまり知らないんですね（；  
。○。）空想アリスです（・・・）

## アリス

叶えることはできない

鏡に寄り添う

不思議な空間

誰も私を見てくれない

見てくれる人もいない

自分さえも私を見れない

鏡に寄り添つた

私の姿は映らない

手をあてた

白い腕

確かに眼には映るのに

鏡には映らない

流れる蒼い雲、白い空

私の前を駆けた影

白こうづかわ

私以外の存在

追いつけない

まるで風のよう

白い光

追いつきたい

貴方だけに見てほしい

私の姿

届かない望み

風より速く駆ける

貴方を私のものにしたい

ずっと私のそばで

私を見てほしい

眼にも映らなくなつた

探しでも見つからない

飲み込まれる異空間

太陽と月

同時に二つが現れる

白い星は赤く光る

白い太陽に紅い月

それを見分ける基準は

なんなのだろう

相談する相手さえいない

光が消えた

白いつむぎ

貴方が消えた

何も見えない

映らない

太陽も月もない

始めから

闇にいたことは

分かつっていた

だけど

見ないようにしてた

白い「うわわわ

貴方さえも私の欠片？

判らない

自分で作つた

月と太陽

一人じゃ寂しいから

色を逆にした

自分は違つつて

そのことを

示したい

決めつけられた

運命を

歩むのは嫌だ

他人が作った

道の上を

なぜ進まなければならぬ

誰も分かつてくれない

そんな世界より

解るものがない

世界のほうが

素敵

幻か

白いつむぎ

貴方を追いかけて

永久に

『籠の中』

大きな鳥籠

広い空間

必要なものは揃つてゐる

毎日暗くなると寝て

日が昇ると田覚める

明日は来ない

昨日が終わりない

不自由はない

外に出る必要がない

出られない

鍵がかかってる

冷たい鉄の扉

鳥が自由を望むのなら

それは酷く悲しいこと

翼が折れた

飛べない鳥は哀れなのでしょうか

では跳ぶことを覚えようか

新しい希望となるように

昨日が終わって

今日が来た

だとしたら明日も来るのですか

夜に太陽が顔を出した

だとしたらそれは明日が来た

示しとなる

『雲の上』

空よりも高く飛んだら

どこに行くのだろうか

たどりつく場所は

宇宙？星？

鳥だってそんなことできない

知らない

鉄の塊が空を貫く

宇宙に行けても迎えられてはいない

かつてな創造

『放浪』

朝の日差しのなかで

- - - - - - - - - - -

孤独にさいなまれ

生きる道を失つ

日が注すそのなかに

立ちつくす

希望をえもてない

夕闇せまるそのなかは

無数の憎しみが溢れ

前を見ることがえ苦痛になる

光が消えた闇のなか

また一つ生まれる

心に巢くつ黒い影

『生死』

星を数えてた

死ぬのが急に怖くなつた

怖くて怖くてたまらない

人はいつ死ぬの

分からぬからすごく怖い

死んだらどうなるの

未知が怖い

見えないものは全部怖い

もし死後の世界が分かつたら

私は何一つ怖くないと思う

それは私だけじゃないだろう

怖くない

自分に言い聞かせる

死ぬのはいつ

明日、明後日？

それとももつと先？

やつぱり怖い

星が流れてきた

星は死者の数と等しいのだろう

何千、何億

計り知れない数

その人達は怖くなかったのだろうか

恐怖にまみれて死ぬなんて

死そのものが恐怖なら

死ぬのは安心じゃないのか

その恐怖から解放される唯一の時

そつぽつともやつぱり生きたい

死ぬのがもつと怖くなつた

## 短編集02（前書き）

なんか自分でも訳わからない詩があります (=――・・・)

『時々雨』

時間の流れに身を任せ

ゆつたり歩く平凡な日々

何も期待しないし

何か起こうとしてほしいとも思わない

ただこの毎日が続けばいい

朝がきて夜を呼ぶ

太陽は月と交代する

そんな当たり前がずっと続いてほしい

『わたし』

わがままな猫

黒い猫

めんじくせがり

でもって

プライド高め

誰にも負けたくない

強くになりたい

とは思つ

けど

努力はやだ

暑苦しいし

楽なのがいい

だから

今日も日陰でまた昼寝

結局昨日と何も変わらない

## 『パズル』

埋まらないピース探してた

探しても探しても

見つからない

どこに落とした?

大事なピース

探しても探しても

見つからない

自分で作った

最後のピース

やつぱり

少し不安定

『神さま』

最近疲れ気味

人を助けてばかりだ

人なんかを助けたところで

僕に全く利益がない

それなのに今まで

僕はよく頑張ったと思う

人は願う時だけ

僕の存在を感じて

叶えてやつたら

僕がいることすら忘れてしまつ

感謝の言葉さえない

それでも人に手を貸してやる僕は

それでもきっと人が好きなんだ

天驅ける鳥よ

『天』

何を望んだ

高く見上げた空

我が生きた証をここへ

紅にそまる爪を牙を

金色に輝く

光はここに集結し

太陽を浴びた

地を驅ける獅子

『光』

高くを望んだか

光注す世界

地を欲したのか

金色の鳥よ

風切る翼

何も望まない

闇、光注す

『代償』

忘れないから

忘れた

あの大切な記憶も

時間も

消えた

僕の胸の中

ポツカリと空いた穴

もう何が埋まつてたか

わからない

自分で空けた穴

不完全

僕の心が

満たされることは

もう一度と

ない

『空色』

淡い青

いつか見た空の色

となりで笑う君は

もうこない

悲しみさえも

忘れてしまつて

残された記憶は

泡のよつこ

消えるのを待つだけ

『感情』

喜怒哀楽

そんな言葉があるけど

僕はそこまで高性能じゃない

感情が理解できない

記憶をえないのだから

もし心を持つことが許されたなら

僕は何をするだろう

何を望み何を思って感じるのだろう

空にかかる虹色の橋を

美しいと思えるのでしょうか

眠れない夜がこんなに孤独だったなんて。

僕はまだ知らない。

いや、知ろうとしなかつただけなのかも。

ねえ、赤い血はまだ僕の体を巡っている?

傷つてどうせつづくものだけ?

太陽に拒絶されたから。

それは大きな力の代償と言つべきなんだ。

望んで手に入れたわけじゃないのに。  
生まれる前から決まってた運命だから。

僕が死んだら何人泣いてくれる?  
嘘はつかないでね?

本当はだれもいないのかな?

それってすごく哀しいよ。

辛い。でもそれか僕の運命だから。  
受け止めるしかないんだ。

僕の味方は聞だけなんだ。そう、明かりなんてない。いらない。  
希望、夢なんてクダラナイ、弱いからそれを手に入れようとする  
だろ？

僕が生まれるずっと前から決まってた。

それが運命、宿命。

あてはまる言葉はたくさんあるけど、それが簡単に背負いつらので  
きないものだと。

そんな簡潔な言葉で埋まるものじゃないと。

わかってる。

それでも、僕のことを呼ぶの？呼んでくれるの？

あれ？

僕は何を望んでるの？何かを望んでるの？  
分からぬ。分かりたくない。

弱いところを見せられない。見せてはいけない。

矛盾の繰り返しで僕は咲くことができたんだ。  
美しいと言つて？僕を抱きしめて。

紅い花弁が散る。体から剥がれるよう。

自分を抱きしめて、紅く染まる両腕が月の光で影を残す。

紅く染まる地に咲く一輪の花。

悪者

僕は貴方が思つてゐるほど人じやない

他人が作り出した僕は  
空想であつて僕でない

誰が辛いつて?  
僕の傷を弄んで楽しい?

嗚呼。 そうだね  
わかつてゐよ

自分はとつとと逃げ出して  
僕を置き去りにする

そんな貴方が憎い  
そんな言葉では現せないほど

貴方の首に突き立てる  
牙があればいいのに

滴る血を全て飲み干してあげる

紅く染まつた貴方なら  
好きになれるかもしねない

僕は一人で生ていけるほど強くない

僕が作り出した僕でさえ  
空想であつて僕でない

何が恐いって?  
僕の心を全て知れる?

嗚呼。どうして

わからないよ

刃を振り回して

僕の心に傷をつけていく

そんな世界が憎い

どんな言葉でも現せないほど

世界を全て破壊する  
力があればいいのに

壊ゆくカケラを全て消してあげる

砕け散つた夢なら

見ることが出来るかもしね

誰かが無言で僕を抱きしめてくれたら  
僕が僕を失うことがなかつたなら

刻みつけられた痕を消すことができたのに

でも、もう手遅れだ

明日は光が差すとは限らない

神が作り出した形でも  
幻想であつて実でない

瞳に入れて?

僕の総てを否定して?

嗚呼。いやだよ

僕を見つけて

涙の粒受け止めて  
雨とともに地に流す

どんなものも嫌い

ただの言葉に見出せないほど

内側のほうから融かせる

氷あればいいのに

流れゆく水を全て放つてあげる

溶けた氷の中の水なら

僕も存在することができるかもしけない

誰も僕に触れることができなくなつたら  
僕をただの形として見てくればなら

刻みつけた痕を消すことができたのに

でも、もう手遅れだ

# 断 り

関係なんて必要ない

くだらない

人間なんて裏切りの毎日

それを憎むのは

お前が弱いからだ

そして、それを言つ

お前も俺を裏切ってる

消えたい

消してしまいたい

感情の束縛を

絡み合う糸を

すべて断ち切つて

お前の形も破壊する

俺が崩れるまえに

感情なんて邪魔くさい

心の形なんてあやふやだろ？

それを型にはめようとするのは

自分が欲しいから

そして、それを壊す

俺はお前を壊したい

崩して、流してやる

感情の束縛を、絡み合ひ糸を

すべて断ち切つて

はやく形を壊したい。

俺が失くなるまえに

俺が見てる空とお前が見てる空

それは同じものでも

互いの瞳に映るのは全くの別物だ。

俺の空はいつも濁っている

澄んだ空など目に映らない

世界を否定し続けて

そこから何も分からなくなつた

手に入れたいものも何か分からなくなつた。

見つけようと星に手を伸ばすが

その先にあつたものは偽物でしかなかつた

真実は一度と帰つてこない

歌いつことを忘れた鳥のよう

俺の声も必要なものなのだろう

叫んだとこりで誰にも届かない

手を伸ばしても何も掴めやしない

黒い翼を背中に宿して

命を狩る

俺の存在理由はそれだけだ。

始まりがあれば終わりがある

始まつた瞬間から終わりも近づく

終わりがない始まりがあればいいのに

永遠に続く出会い

愛するものを永遠に手にすることが出来るのに

だが、終わりを手にすることが

それが、我が運命ならば

求めずにはいられない

新たな形を

はまり込む綺麗な形を

望まずにはいられない

運命の続きを

美しい形のままで

俺に崩させてくれ

運命に抗う命の光を

仮面を被つた俺は

それを二度と脱ぐことはない

過去を断ち切つて

闇を進むこと決めた

過去を思い出したくないから

忘れようとしてた

新しい傷をつけることで

世界から逃げようとしてた

一人になることで

他人を守ろうとしてた

俺が望んでた空は高すぎた  
伸ばせども手が届くことはない  
世界が俺を否定した  
俺も世界を否定した  
生きている意味を求めてた  
運命だつて碎ける  
今日も空は高すぎた  
だから否定したい  
間違つてるのは俺じゃない  
世界のほうだ  
何故それに誰も気付かない  
最初に気がついた俺が  
世界を変えようか  
全てを認めさせる為に

世界を破壊して夢を創る

後から俺について来るな

協力者は必要ない

一人でこなすこと

意味があるのだから

理解出来なければそれでいい

俺の感情は誰にも解らない

理解者は必要ない

孤独を耐え切ることで

意味を見つけるのだから

世界は俺を置き去りにして

流れる毎日の繰り返し

俺一人で創り上げる

理想の世界

俺の世界を

いつも夢を追いかける

いつも逃げられる

指があと少し長ければ

掴むことができる

届かない

いくな、それ以上遠くへ

行かないでくれ

声にならない叫び

空振りした手の平に

汗が流れ落ちた

世界の全てを駆けた

追いかけても届かない

俺には力不足なのだろうか

呆然と空を見上げた

雨が当然降り出した

俺の味方はいない

今更、思い出した

急に苦しくなった

何のための夢なんだ？

何を追いかけていたのか分からなくなつた

失つたものに気づいた

あの時にはもう戻れない

目の前の橋が崩れた

進むべき道はどこにもない

嘲笑うかのように雨が降つた

強く強く俺を打ちつけた

もう田の前の光に興味はない

『絆

記憶を辿つてた

いろんな色がそこにあつた

全部私の好きな色に

染めることができたらいいのに

古い記憶の傷を治したい

繫がつてゐる糸を集めた

糸は細いけど切れなかつた

それを全部断ち切れたら

思つがままに操れたらいいのに

操られているのは私だと知つていた

けれど、逃れられないでいた

運命を変えるなんて大層なことは

言えないけど自分の傷は癒せるようになりたい

俺の目の前、光が駆け出す  
俺にどうすることもできない  
お前は俺に何を望む  
何も出来ない

血を浴びることに慣れたから  
そんな俺が憎いんだろ  
世界も俺を見捨ててくれ

味方はいない

暑く燃え上がる俺の鼓動の音  
失いすぎた何かを取り戻す為に  
冷たい氷のような俺を溶かしてくれ  
未来に進むことができる足を与えてくれ

明日さえも見えない暗がりの中の俺は  
何を失い得たのか

答などない

だが、その何かを求めて

永遠に進むことを決めたから  
あとにはもう、戻れない

特別な存在になりたい

みんなから認められたい

全てが一番だつて  
力がなければ意味がない

国を変えようたつて  
才能がなれば不可能だろ

意味のない称号なんていらない  
事実だけが欲しい

特別というそのものが

夢ばかり追いかけた  
まだ幼くて  
現実が見れなかつた

今でもまだ

実感はできない

日常から足を踏み出した  
戻れない扉を押し開けて

闇に呑まれた

扉が閉まつていく  
俺だけを取り残して

夢が碎け散つた  
力ケラが四散した

細かすぎて一つしか手に出来なかつた

見つけられなかつたんだ

辺りが暗すぎて

こんな暗い場所で俺は生きていくと

いつの間にか消えた

理性と感情

血に沈んで流れ出た

水の如く

形が無いものほど失つた跡が残る

空洞の心

埋まるものを探してゐる

毎日が明日のためならば今日はなんぞう

疲れた最後に流れ星

夢のカケラに少し似ていた

世界が終わる音を己の耳で聞け

夢はもう終わり

世界が崩れる  
瓦礫のように

闇と光が混じる

どっちが強者?  
どうでもいい

世界が碎ける

打ち付けられた水のように

飛び散つた水しぶき

元の形に戻すのは可能?  
出来ないと知りながら試す

『君に』

他人を信じるな

君はそれができないから  
苦しいんだって気付いて

人なんて自分以外は皆、同じ  
どりでもいいと思つてる

それが人だから

それを憎むのは間違いだ

そしてそのことに置いては君も同じだ

違つのは「己」の器の形の違い

もう君の器は傷だらけだ  
感情が流れ出してしまつよ

満ちることのない感情

鼓動の音に耳澄ませて

意味のない埋め合わせを考えて

明日なんて欲しくない  
次なんて必要ない

今日が終わる  
それだけでいい  
何も望んでない

明日を求めるに疲れた  
自らの体を保つのに疲れた  
明日もまた疲れる

疲れの繰り返し

いつになつたら解放されるのか

次の場面は快樂か?  
苦痛はもういやだ。

蜘蛛の巣のように心に張り巡らされた糸  
重く巻きつく

心の束縛を振り払い  
鉛を羽のように軽くしたい

鳥が空を飛ぶ

その先へ越えていく

蒼い空が崩れ落ちた  
雲はどこに行つた？

あんなにも気持ち良さそうに飛んでいた鳥さえも

繰り返されるSTAGE

やりたくもない第二回戦  
欲しいのは出口だけ

入ってしまえば後には引けない

RESETしたいよ

世界の秩序を

残り回数はもうない

だから、

せめてヒントが欲しい

田の前の壁を破る答えを  
投げてくれ

今宵、月は美しく  
蒼を貫く輝く星空  
水面には映らない何も見えない

下からのぞく雨のしずくがポツリ  
波紋が広がるそれだけを見つめていたけど

NEXT STAGEが開かれる  
進む道は与えられる  
選ぶ権利なんてない  
高い壙に囲まれた一直線

RESETはもうできない

誰にも声は届かない  
誰か、声を拾つて

花が宇宙に咲く  
紅く紅く小さな薔薇

紅い薔薇が落ちてきた  
目覚める前に

あんなにも跨り高くに咲いていた花さえも

壁が聳え立つ

進むしかないNEXT STAGE

欲しいのは力だけ

入つてからも後には引けない

厚い扉の向こう側

RESETしたいよ

己の運命を

残り回数はもうない

次の開幕の合図だけに耳を澄ませて

渦巻く世界

流れる星空

遠い天井

だんだん見えなくなる

感覚が狂う

僕はどうここ立つてる?

地球の果て

空の中なのか

足場がふらつく

飛んで行つた白い羽

掴もうと手を伸ばしたら

バランスを崩して落ちていく

何も感じず

近づく地面

飛び去る星は僕に何を告げる？

空想と現実が

入り混じって

訳が分からぬ

そんなことで悩むのは

馬鹿らしいと思つ？

でもどうすればいい？

こんなちっぽけな僕では

何にも解決することができない

一人で生きれるなんて

強がり言つたけど

そんなの不可能だって

わかってるんだ

星の中で浮かんだ僕は

また訳が分からなくなつた

もしかしたら僕も

星のひとつなのかもしれない

小さく光る紅い星

流れ星拾つて

身にまとつた

少し明るくなれたかな?

そこの星も全部集めて

僕の体に貼り付けた

キラキラ光るお月さま

僕も君のように光つてますか?

辺りを見回すと

暗い闇だけ

僕は一人さびしいな

お月さまどうか

僕に友達をください

一人は嫌だ

おいてかないで

温かい温もり感じた時には  
温かい掌が僕の頭をなでてた

嬉しくて

涙が出そうになった

愛してると

それ以上を

伝えたくなつた

掌を握りしめて

顔をすりよせて

抱きしめた

あつたかいあつたかい

心と体を

重ね合させて

太陽を作った

見て、お月さま

君より明るくなれたでしょ

星のない夜は

もう見てられない

田をそらした

背けてはいけないものまで

俺の星はどこへ行つた

力が欲しいとき

びつして奪う

不運の連續がおこる

敵、味方関係ない

合理的に判断すれば

どちらが味方かわかる

逆の判断をすれば

背負う荷物が急に増えた

だけど

確かな感覚を感じた

俺が背負うものはなんだ

過去、現在、その先は

こればかりは

何もわからない

合理的に考えられない

不完全な人間なんだ

俺は

まだ形が何もできていない

回りの枠はできないまま

中身だけが満たされてく

人の温もりを感じたのは

いつが最後だつたろうか

田の前のこと

捕われすぎて

何も考えられなくなるその前

くたびれた身体に

重い荷物はかなり堪える

それでも俺は

それが捨てられずにいた

捨てようと思えば

簡単に壊すことができるのこ

こんなのは理的じゃない

そんなのわかつてゐる

だから俺の星が消えた

だから俺の力が消えた

何も判断できなくなつたから

自分を信じる他ない

一筋だつた道が

枝分かれして

複雑に入り組んだ迷路になつた

進んでも前に行つてゐる気がしない

むしろ後退してそだ

そんなこともわからない道

普通ならあきらめるだろうが

俺は違う

普通ではないから

神経が狂つてゐる

何かがはじけた時から

俺の鼓動は止まつたまま

何かを手に入れるため

もがいてもがいて

深く墮ちる

荷物を捨ててしまおうか

そうすれば少しは楽になれるのに

わかつてもできないこと

それを否定しても

俺にはできないことがある

これほどの力を持つていても

人間でなくとも

俺にはまだ心が残っているから

だから、俺は不完全だ

## 夢の形

蒼い蒼い空に手をかざしたら自分も蒼くなれるかな

白い白い雲を捕まえたら乗せてもらえるかな

やうこつた決まりなんてない

どひやつて決めるの？

どひやつて知るの？

はじめは誰？

何で決めつけの？

やつてみたことはあるの？

最初から夢見ないなんて意味分かんない

どひじて？

宝石を捨てるの？

ねえどひじて？

ダイヤモンドよりも輝く星を見たくはないの？

それを手にしたいから

多  
こ  
ほ  
ど  
こ  
こ  
と  
は  
言  
わ  
な  
い  
け  
ど  
ど  
れ  
だ  
け  
増  
え  
て  
も  
構  
わ  
な  
い

空にまた返して?

増やして

星を数えて

ダイヤモンドを手放さないで

夢を捨てないで

不可能なんてないのだから

飛んで行つて見せるよ

私の背中に生えた翼で

飛んで飛んでみせる

空が続く限り

空の果て

“いいまでも

私は行くよ

少なくとも寂しいよね

早く射ぬいて

流れ星

私の心に響け

雨の音

星の流れる夜の雨音

耳にして

僕の心に響く

君の歌声

寂しいのかな？

孤独なんて言わないで

同じ夢を田指せばいいじゃない

一人で欠片を掴んで握りしめて

ガラス破片キラキラ

飛び散つた

夢の形なんてどんなの？

わかんないよ

形がなかつたらどうすればいいの

どうやつて作ればいいの？

模りをしなくちゃ造れないよ

何にも

もつと欲しい

欲しい

何が欲しい？

形がないもの

だから分からぬけど僕の中を満たす何かが欲しい

私の夢は大きく広がつて行く

一人では抱えきれない

ああ、逃げないで

僕が手伝つてあげるよ

捕まえてあげる

手をつなげよ

歩けよ

あの光の追い続けて

僕らは影になる

私の心で光が弾ける

小説についての詩です。  
ギアスのじやないですよ f^\_\_^ ;

僕が望んで手に入れた世界は  
破壊と破滅しか呼ばない  
幸せを追求した形なのに  
どうしてこうなるんだ?  
子供の時からの夢  
血に塗られたあの日から  
誰も死ない  
紅い血の色なんて見ない  
そんな世界を望んだのに  
白い死神がまた僕の目の前に  
僕の大事な人を奪っていく  
僕の叫びはもう誰にも届かない

それならいつそ

君の持つ死神の鎌で

僕の首も取つてはくれないか

やり返す力もない

非力な僕が

生きている意味など何処にあるとこりのだ?

自分の色なり田を擲ける」ともしないのに

美しいとさえ感じるのに

誰が色は見れない?

他の色全てが

誰が為に刀を抜く？

己だけの為に

僕はただ出口を探してゐる

人間一種類しかいないんだよ

使われるか使うか

ただそれだけ

クダラナイほんの小さな事

自らの努力を怠れば上に行けるわけないだろ

まずそんな奴に上に立つ資格などない

それなのに上に文句を言つお前らを見ているとヘドができる

天に向かって唾を吐くと自分にかかるんだよ

そんな事もわからないのか？

理屈で考えないで前進すれば見える景色は必ず変わる

屁理屈を言つ暇があつたら前に進める足を多く踏み出せ

一度と迷がさぬよつ

淡い夢抱いてた

ただの夢だとわかつてた

私はまだ子供だった

何も分からぬまま前進する

周りなんて見ないで

前に見える道だけを世界だと思ってた

道が途切れたらどうなるかも考えず

ただ、進んだ

煌々と

輝く太陽の下

何も考えないで

嗚呼、道が消えた

もう動けない

世界から消えた一つ

私はどこに立ってる?

動けなくなる前に道を作れば良かったのに

そんな後悔は無駄

一つ途切れた道の先端いる

今日もここにひづくまる

ただ煌々と輝く太陽は今も上にある

苦痛でしかない世界は破壊してしまっても構わないというがそれを成したところどうなる?

何が変わるとこりのだ?

世の支配者と君臨したところで何が手に入る?

地位、名声、富、力…

それが欲しかったわけじゃないのだろう?

何が欲しいのか声に出さないと分からぬ  
ただ貴方の瞳の奥に映るのはこんな世界じゃない

世界の中心は変動する

己に重點を置いたとしても

それを永遠と勘違にする

救いよつのなご血脉中心者

抗うじてやれできぬいのに

何に懇願しているといつ

自分自身に問うても答はでるか

でなければ次に何をするべきか

そんなこともわからなければ

残される道は自滅のみ

作った、笑顔

作った、自身

本当は何をしたいかも忘れてしました

それほどに

耐え難い苦痛

今ではそれを難無く熟す自分が憎い  
真実を告げることのない表情  
いつも仮面を被り

内心を奥底へと落とす

表面上に浮き上がりぬよう  
錘をつけて深い底へ沈める

二度と触れることのないよう  
誰かに繋る手を伸ばさぬよう

自らの腕を切り落とす

何の躊躇いもない  
何の苦もない

自身の醜い心を永遠に隠す為ならば

身体が崩れようが

朽ち果ててしまおうが構わない

それほどに醜い自身はなんだ？

誰も知らない本当の自分  
知らされることのない心

悔いを改めることが出来るのなら  
この魂を悪魔に捧げても構わない

漆黒の翼で降り立つ

薄ら笑いを浮かべながら  
私の首に刃を立てて

私の血が溢れ出す

そして最後の一滴が落ちる音を聞くその時まで

演じ続けよう

悪魔を宿した身体で

天使の笑みを

最高の善人を

この身、朽ち果てるまで

存在を否定されたものはどうすればいい

ただ憎しみだけを募らせて

世界の破壊を試みる

自分を否定したものが憎い

それを育てた世界が憎い

ただ憎しみだけを糧にして

今日の世界を越える

夕田を背中に

ビルを仰いだ

高すぎて  
大きすぎて

てっぺんは雲の中

風に押される

ビルの狭間で

強すぎて

圧すぎて

押し戻される

せつかく歩いた道程は無意味

残るのは足跡だけ

感情に抗つのは辛い

それを永遠に堪えるのは苦痛

だからいつでもをさらけ出すことなんて出来ない

鎖、鎖、鎖

私は口を縛る幾多の業に従うしかないのだから

何かが欲しい

何かがわからない

闇、闇、闇

心はいつも漆黒に染まる

深い深い奈落にいる私には光が射さない

泣き声が聞こえる

何処からかはわからない

喰らいくせ

自分が欲する全てを

望みはなんだ？

考えるな

自分の欲望をさらけ出せ

死を畏れ

死を想え

扉はすぐ横に

花が咲く

枯れる命を養分に

今日も世界は僕等を乗せて廻る

僕は世界のために

君は明日を繋ぐ橋となれ

翼は休むことを知らず

今日も天を翔ける

僕らに残された時間はあと少し

何がせまつてくるかわからない

背中についたはずの翼は

今はもうない

塵の如く消え去ってしまった

自らの手で消したのだから

何一つ後悔はない

「今、俺には天が味方してる」

神の降臨だ、なんて

何一つわかつてないなあ。

君の背中にあるものはなんだい?  
悪の翼じゃないか

醜く黒に染まつた無数の羽が

全く、笑えるよね。

天の味方なんて所詮、  
偶然に過ぎないんだよ。

神だなんてみたこともないのによく云えるよね？

神なんていらないんじゃないの？

だってこの世は悪に満ち溢れている。

これを壊さない神がいるのなら、いないも同然。

だから僕がそんなマヌケな神に変わつて悪を叩いてあげる。

だから君はそこで震えていて。

僕がその震えを断ち切つてあげるから、ね。

愛が何かわからない

そう、咳いて

今にも泣きだしそうな空を見た

そうして、顔がぬれた  
どんどんぬれた

凍えそうだ

だけど、傘もささないで歩いた  
持つてなかつたから

どんどん溺れてく

雨宿りする場所さえ見つけられない

凍りそうだ

それで自業自得と言つてしまえば簡単で

首に縄をかけて  
手足を鎖で縛る

痛みなんてどうでもいいわ  
ただ私を束縛して

自由も結構辛いのよ

自由じゃが一番の束縛、なんてあなたが言つたのよ？

私に何を求めたの？  
それとも…？

嗚呼

あなたの愛を受けたいわ  
唇にあなたを重ねて  
深く愛して頂戴

泣きたいほど辛いのなら泣いてしまえばいい  
逃げ出したいほど怖いなら逃げればいい

だれも咎めなどしない  
それがあなたの道だから

あなたのこころに忠実にいればいい

涙が流れた後も  
後ろに続く足跡も

すべてがあなたのものだから

一人だなんておもわないで  
無理に進もうとしないで  
足が絡まってしまうわ

やめて、声をあげて私の胸で泣いて  
すべてを抱え込まないで  
逃げ道ならここにあるわ！

ただまつすぐひたすらに進んできた道なんて面白くないわ  
山があつて谷があるそれが人生でしょう？

そう、だから今までいいのよ

あなたはあなたでいること  
私は私でいることがこの世で最も重要な点よー

だから手を取つて今はただ踊りましよう  
進まなくたつていいじゃない  
後退だつて前進よ

あなたはまだ分かつてないだけよー！

さあ、手をお取り下さい。王子様  
プリンセス  
王女様と踊りましよう

握り合つた手から伝わる熱が熱すぎて火傷しそうよ

今を楽しく生きればいい  
ただ笑えばいいだけよ

ほら、あなたの道の終点が見えてきたわ  
ゴール

## 本当

本当は何がしたいかなんてわからないんだ

でもじつとしていられなくて。

本当に欲しいものはなんなんだろ？

考えただけで胸が苦しくなるよ。

どうして？

わからない僕の問いは山を作つていくばかりさ。

積もる山を崩そうとしてスコッシュ手に穴をあけたけど

全然減つた気がしなくて

だから、座り込んで膝を抱えていたんだ。

本当つてなんなの？

わからないから余計に辛いよ

心を締め付けるこの手は僕のものなんだって分かつてたよ。

答えを探して走り回って。

小さな石に躊躇って、こけて、泣いた。

その石を握りしめて遠くへと飛ばしてしまいたい

振りかぶって投げても飛距離は3メートル。

子供みたいに足掻いて

足掻き切った先には何が待つのだろう。

僕の待つ「本当」はそこにあるのか？

最近、気付きました  
よつやく気付きました

どうやら僕には虚言癖があるようです。

また今日も一つ嘘をつきました  
だから一つを本当にしようとした  
朝になつても無理でした

嘘だと打ち明けようと思つたけどそのまま黙つてました  
次の日も黙つてました  
ずーっと黙つてました

そしたらそんな嘘の山が出来ました

東京タワーが富士山になつてエベレストになりました。

毎日エベレストは成長します  
そして僕は毎日餌をあげます

それは宇宙に届きました

それは太陽を隠してしまいました  
だから僕の中はずーっと夜になりました。

## 必要ですか？

転んでばかりいるこの足が嫌になつて足を捨てました。  
汚い字しか書けないこの手が嫌になつて手を捨てました。  
人を傷つける言葉しか吐けないこの口も必要ないと捨てました。  
周りの悪口を聞くのも嫌だつたので耳も捨てました。

後はなんでしょう。

少しは体が軽くなりました。

けれどまだ不要なものが付いているよつです。

どんどん人の手で汚されていく世界を見るのも嫌になつて瞳を捨てました。

排気ガスで汚れた空気の臭いも嫌なので鼻も捨ててしまいました。

まだ不要なものはあります。

静かなのが好きな私にとつてドクン、ドクンと体に響く音も嫌でした。  
だから私は心臓を捨てました。

まだ不要なものはあります。

けれどもそれを取り除くにも体が動きませんでした。



## 涙の池に

どうして君はそんなに悲しそうに笑うの?  
無理して笑う必要なんてどこにもないのに

全てを一人で抱え込んで、いつも周りばかりを気にしている

悲しいときは悲しいと言つてもいいんだよ  
辛いときは辛いと言えばいいんだ  
その為に僕がいるんだから

ずっと一人で抱え込んで壊れそうになつてゐる君は見たくない  
そんな君を見ると僕の方が壊れてしまいそうになる

僕の両手はいつも開いてるよ  
君だけを抱きしめる為にずっと

辛いなら泣いたつてよかつたんだよ  
いつも感情を抑え込んで、泣きたいのに笑つて

涙の流し方を忘れてしまつた君は全て内側にしまい込んで溺れそうになつてゐる

流れに逆らえないまま

君は届かない空に手を伸ばしたまま

沈んで行く

早く僕の存在に気付いて

手は届く位置にあるよ

さあ、僕の手を掴んで

そこから引き上げてあげるから

沈みきつてしまつ前に  
ねえ早く気付いて

……お願いだよ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8281e/>

---

螺旋階段

2011年10月4日16時39分発行